



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヤヌシュ・コルチャックの教育実践〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	大澤, 亜里
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13340号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72093
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ari_Osawa_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：大 澤 亜 里

学位論文題名

ヤヌシュ・コルチャックの教育実践

本論文は、ヤヌシュ・コルチャック（1878-1942 年）が院長を務めたユダヤ系の孤児院ドム・シエロット（1912-1942 年）における教育実践を歴史的かつ具体的に明らかにし、彼の子ども観および教育思想の形成や深化を捉えることを第一の課題として取り組んだ。また、第二にコルチャックの教育実践を可能にした具体的条件としてドム・シエロットを設立した孤児救済協会の運営状況について、第三にその歴史的背景として当時のポーランドおよびワルシャワの児童保護の状況について明らかにすることを課題とした。

ポーランドにはコルチャックの生涯や思想に関する研究に次いで教育実践に関する研究が多く存在する。それらはコルチャックの“教育体系”を構成する各方法を機能別に分類し把握しているが、各方法がいつどのような経緯で導入され、実際の生活の中でどのように機能し、その後どのように展開されたのかという具体的な実践の変遷については明らかにしていない。一方、日本においてはロシア語、ドイツ語、英語に翻訳されたコルチャックの著作および研究成果に依拠しながら、彼の子ども観や教育思想、子どもの権利思想が明らかにされてきた。その中で、彼の思想がドム・シエロットの教育実践に裏打ちされ、また体現されていると指摘されているが、その実践についてはほとんど明らかにされていない。本論文では、日本においてはもとより、ポーランドにおいてもほとんど取り上げられてこなかった多数のポーランド語原典資料を読解・分析し、教育実践の具体像とその変遷を解明した。

第 1 章ではドム・シエロット設立以前を対象に、子ども集団と初めて関わったサマーキャンプにおける教育実践と、その実践を通して形成したと考えられる教育思想について明らかにした。ここでは彼がキャンプに参加した年（1904、1907、1908 年）に発表した体験記を中心に、初めての実践の試みを分析検討した。コルチャックは様々な試みを通して、子どもが持つ力や可能性を確信し、子どもたちが社会を形成していく様子を観察したが、このことが次で見る教育思想の形成につながっていった。キャンプ参加と同時期に執筆した「生活の学校（Szkola życia）」（1907-1908 年）には、コルチャックの理想とする学校や教育について描かれているが、これまでの思想研究は注目してこなかった。本論文では上記著作を読み解き、教育実践の要として孤児院設立後も重視し続ける「労働（praca）」という彼独自の概念を見出した。コルチャックは「労働」—本論文では、子どもたち自らが生活している場の運営に従事し、仲間や教育者と共同しながら生活し生きることと定義した—を通して、子どもたちがより良い生活や人生について学ぶことを重視していた。

ドム・シエロットの設立期を対象とした第 2 章では、開設時にコルチャックが示した「活動計画」の 3 つの構想— a) 健康な子どもの発達について知る、b) 大人から子どもを解放する、c) 養育施設の精神を改革する—について検討し、そこから教育実践を分析する 7 つの視点を導き出した。7 つの視点とは、a) に関して①子どもの観察とその記録、b) に関して②生活に必要な家事仕事および年少者の養育を子どもたちが担う方法、③子ども自身が生活上の様々な問題解決や決定を行う方法、④情報や意見を伝達・交換・共有する方法、⑤

自分自身について理解し自己教育を促す方法、c) に関して⑥外の世界との交流、⑦子どものプライバシーや財産を保障する方法である。以上の3つの構想を重視した本論文独自の分析枠組みを用いることで、設立以前から1930年代までの複雑な教育実践の全体を構造化して把握することができ、またポーランドの先行研究ではなし得なかった教育実践の一貫した史的動態把握が可能となった。

第3章はドム・シエロツト設立(1912年)から先行研究が依拠してきた『子どもをいかに愛するか(Jak kochać dziecko)』(1920年)出版までの時期を対象とした。同著作を基に、設立から第一次世界大戦開戦までのわずか2年間で実に多様な教育方法が導入されたこと、コルチャック帰還後から1920年までの間に子どもたち自身による裁判制度が改善され、議会制度が導入されたことを明らかにした。さらに既存の研究が看過してきたコルチャック著「裁判新聞(Gazeta sądowa)」や教育主任ヴィルチンスカの記録から、「労働」の方法である“係り仕事”や“仲間裁判”を導入した後にコルチャックが試行錯誤する様子や、変更改善していく経緯を叙述することができた。

『子どもをいかに愛するか』に依拠する先行研究では、1920年までの実践の把握に留まっていたが、本論文では1921年以降の資料の発掘に努め、第4章では1921年から1928年までの教育実践を取り上げた。1920年代のコルチャックの著作を読み解き、生活上の問題解決や決定を行う裁判制度と議会制度が確立され、自己教育を促す多様な方法が導入されたこと、またこれまで「労働」と呼んでいたものを「自治(samorząd)」という言葉でも表現するようになったことを指摘した。さらにドム・シエロツトの子どもや「補助的職員」としてその運営に携わっていた青年の記録等から子どもたちの具体的な姿を描くことができた。その結果、先行研究で評価されてきた子どもの自治は、子どもたちにとって責任の重い「労働」であったことが分かった。

コルチャックが関わったポーランド系の孤児院ナシュ・ドムの教育実践は、これまでドム・シエロツトのそれと区別されることなくコルチャックの実践として描かれてきたが、第5章ではそれ単独で取り上げた。院長ファルスカの著作やナシュ・ドムの実践記録を分析検討した結果、多少の違いはあるもののドム・シエロツトと同様の教育方法が導入され実践されたことが確認された。

第6章では1929年から第二次世界大戦開戦までの教育実践を対象とした。歴史的には困難な時代であったが、この時期の子どもの記録や「ドム・シエロツトの規則(Regulamin Domu Sierot)」(1933年)から、新しい教育方法が導入されることも変更されることもなく、これまで通り機能していたことが読み取れた。また当時の『教育百科事典(Encyklopedia Wychowania)』(1937年)や雑誌投稿記事等から、コルチャックの教育実践に対して高い評価と厳しい批判があったことを指摘した。

従来の研究では、コルチャックの思想や実践のみを取り上げ論じるものが多い中、本論文では各時期における孤児救済協会の運営状況と、社会および児童保護の状況を明らかにした。これまで手をつけられずにきた同協会の定款や活動報告書(1910年度から1937年度まで)、定期刊行物等から事業内容およびそれを支えた財政状況を把握することで、ドム・シエロツトの運営を最優先にする協会の方針がコルチャックの実践を可能にしたことが確認された。また日本では全く知られていない、植民地時代から独立を経て第二次世界大戦に至るまでのポーランド・ワルシャワの児童保護活動の流れを描くことで、その中にコルチャックの思想および実践を位置づけることができた。